



聞き慣れない言葉？教科横断的な学習について 本校でも少しずつチャレンジしています！

1 小学校で「教科横断的な学習」が必要な理由

従来の小学校教育は「国語」「算数」「理科」と縦割りで学ぶのが一般的でした。しかし、これからの時代はそれでは通用しくなっています。現実の課題は「教科」に分かれていない環境問題、地域活性化、防災など、私たちが社会で直面するリアルな課題は、算数や理科といった一つの教科の知識だけで解決することはできません。知識を「使う力」の育成（探究学習）単に知識を暗記する（インプット）だけでなく、「国語で培った読解力を使って、理科のデータを分析し、社会の課題解決に活かす」というような、知識を統合して社会で実践する力（アウトプット）が求められています。主体性と協働性の向上「総合的な学習の時間」などを軸に、子どもたちが自ら問いを立て、仲間と協力して解決するプロセスを通じて、変化の激しい時代を生き抜く力を養います。

2 大学の「文系理系の解体（文理融合）」が進む背景

小学校での教科横断的な学習の流れは、当然その先にある高等教育（大学）にも直結しており、現在、多くの大学で従来の「文系・理系」の枠組みを取り払う動きが加速しています。従来の構造（縦割り）から、これからの構造・文理融合：データサイエンス×社会学、AI×倫理、デザイン×工学など、異なる分野を掛け合わせ、複雑な社会課題にアプローチできる。

解体が進む主な理由：「理系だけ」「文系だけ」では解決できない課題の増加例えば、自動運転技術（理系）を社会に普及させるには、法律の整備や事故時の倫理的判断（文系）が不可欠です。また、ビッグデータ分析（理系）をマーケティングや心理学（文系）に活かすなど、両方の視点がなければ成立しない仕事が増えています。産業界（企業）が求める人材の変化企業が今求めているのは、「数式は解けるが社会のニーズがわからない人」や「文章は書けるが IT やデータが全くわからない人」ではなく、双方の対話ができる、あるいは架け橋となれる人材です。

18歳人口の減少と大学の生き残り：伝統的な「学部」に縛られていては、受験生からも社会からも選ばれなくなっています。そのため、大学側も「情報データ科学部」と「人文学部」を融合させたような、実践的で魅力的な新学部への改組（解体と再構築）を進めています。

まとめ：教育のゴールが変わった

これまで「正解のある問題をいかに早く正確に解くか（文理それぞれの専門性）」が重視されてきました。しかしこれからは、「正解のない問題に対して、文理や教科の枠を超えてあらゆる知識を総動員し、新しい価値を創り出すこと」が求められています。小学校の教科横断的な学習はその土台作りであり、大学の文理解体はその総仕上げと言えます。日本の教育は今、まさにこの地続きの変革期にあります。 ※下記の「STEAM」は「スチーム」と読み、重視すべき主な学問領域5つを英語で表した語の頭文字をとったものです。

科学（Science）科学技術（Technology）工学（Engineering）芸術（Art）数学（Mathematics）

教育の変革：なぜ今「教科横断」と「文理融合」が必要なのか？

日本の教育現場で「教科の枠組み」や「文理の壁」が取り払われている背景と目的

小学校の「教科横断・STEAM教育」

現実の課題は「教科」で分かれていない



環境問題や防災など、リアルな課題解決には多角的な視点が必要。

知識を統合して「使う力」を育む



読解力とデータ分析を組み合わせ、社会で実践する力を探究学習で育む。

STEAM: 科学技術に「感性」を掛け合わせる



STEMにArts(デザイン・倫理)を加え、人に寄り添うイノベーションを創出。

複雑化する社会課題



従来の「縦割り」知識だけでは解決困難。
知識を統合し、新たな価値を創り出す教育へ転換。

構造変化の整理(従来の「縦割り」から「融合型」へ)

従来の構造(縦割り)



- 文系・理系の明確な分離
- 専門は深まるが視野が狭まりやすい
- 伝統的な学部制に縛られた教育

これからの構造(文理融合)



- データサイエンス×社会学などの掛け合わせ
- 複雑な社会課題(気候変動等)へのアプローチ
- 実践的で魅力的な新学部への再構築

大学の「文理融合・学部の解体」

AIや自動運転には「文理両方」の視点が不可欠



技術(理系)だけでなく、法整備や倫理的判断(文系)の融合が求められる。

産業界が求める「架け橋」となる人材



ITと社会ニーズの両方を理解し、対話ができる人材が選ばれる時代。